沖縄プロジェクトレポートⅢ

東京土建渋谷支部　書記　工藤真由

※前半に沖縄プロジェクト以外の話がありますが、最後に回収されます

2024 年 7 月 23 日、目黒支部の沖縄プロジェクト報告会。千葉さんから、2025 年の沖プロ日程を教えてもらい、翌日には渋谷支部のパソコンにある共有日程表へ休みを入力しました（これが渋谷支部の有給の取り方です）。

12 月 1 日、吉祥寺シアターで、劇団燐光群（りんこうぐん）による「沖縄戦と琉球泡盛」を観劇しました。以下、劇の大枠です。

琉球王朝時代からの歴史を持っていた泡盛。しかし、島民の 4 人に 1 人が殺されたと言われる沖縄戦で、島の地形が変わるほどの米軍の猛攻により、泡盛の酒造所も根こそぎ破壊されました。泡盛作りになくてはならない沖縄固有の菌「黒麹（くろこうじ）」も消滅したかと思われましたが、戦火を生き延びた蔵人が瓦礫の山を掘り起こし、奇跡的に発見。沖縄の人々が意地と努力で泡盛を復活させる過程を描いた劇作品です。現在の自衛隊配備などもストーリーに盛り込んでありました。

その夜の吉祥寺の沖縄居酒屋は、どこも観劇した人でいっぱいでした。

2025 年 2 月 14 日～16 日、夫婦で広島を旅行しました。戦後 80 年と、12 月に日本被団協がノーベル平和賞を受賞したことを広島で実感したかったからです。私は X のプロフィールに「好きな方言は福島弁と広島弁。第二の故郷は沖縄」と書くほど、この 3 県に恋をしています。きっかけは平和運動でしたが、今ではただもうすごく好きな状態です。言葉使いもお酒も食べ物も街並みも山々も海も大好きで、旅

出発のご挨拶

沖縄に到着

我らが２号車

行先でも広島弁が聞きたくて、宿のお風呂で隣にいた女性に「広島の方ですか？」と声をかけていました。今思えば広島の人が地元の宿に泊まるはずもなく、「沖縄なんです。今日は仕事で来ていて」「私よく沖縄に行きます。軍事基地をなくしたいんです」「ありがとうございます。私もです」「お風呂あがってロビーで話しませんか？」こんな流れで一旦それぞれ部屋に戻った後にロビーで落ち合い、ビールを飲みながら話をし、最後に LINE を交換しました。「沖縄へ行くときは連絡します」と約束をして。

6 月 24 日、本部での公契約担当書記会議。休憩時間に、広島で出会った女性リマさんへ「明後日の 26 日から 28 日まで沖縄に行きます」と LINE をしていたら、山本さんから「沖縄、いよいよですね」と声をかけられました。いよいよだ、と思いました。

6 月 26 日早朝、羽田空港に、目黒支部の事務所を開けておくために沖縄へ行かない山本さんが見送りに来ていました。堀田さんに「すごいですね、偉すぎません？」と言うと、「多分沖縄のお土産が欲しいからです」と言っていて笑ってしまいました。本当に仲良しだなと思いました。

機内で孤独のグルメ I 話分と ANA の雑誌を眺めつつ、うとうとしていたら沖縄の上空にいました。深い緑色の島を、金色の砂浜が縁どっていました。「空港が混み合っているため着陸が遅れます」というアナウンス。那覇空港に着くと、銀バエのような自衛隊の戦闘機がいくつも配備されていました。

空港から辺野古へ向かう途中に、中城(なかぐすく)サービスエリアへ寄りました。そこでお昼ご飯に食べたゆし豆腐そばがあまりに美味しくてびっくりしました。

ふわふわのゆし豆腐そば

辺野古基地ゲート前

蜘蛛も巣に「NO　BASE」

送迎車を待つ

ゲート前での座り込み

不屈の行動

じりじりと焼けるような日差しの下、久しぶりの、辺野古基地ゲート前での座り込み行動。私はすぐに機動隊に椅子ごと持ち上げられ、あっけなく排除されました。

機動隊の人たちの態度が以前と比べて丁寧になっていて不思議でした。いたわるような人の降ろし方、荷物もそれぞれの参加者のそばに持って来てくれていました。しかし、その後のダンプの搬入時間は、延々と続く地獄のようでした。何台も何台も何台も、気が遠くなるような台数の 10 トンダンプがゲートを通過していきました。荷台に積まれていたのは土砂というより岩でした。こんなに沢山の岩が、辺野古の海に投げ込まれていく。これが一日 3 回も？何年も？ひとを殺す軍事基地を作るために？現実とは認めたくない、とてつもなく残虐な行為を目の当たりにしました。普通に本土で生活していたら、国家権力をここまで酷いと感じる体験はそうそうないと思います。

ダンプの搬入終了後、丘の上から、砂浜から、基地を眺めました。車のラジオからは、「在日米軍が飼っている犬が、島民の犬をかみ殺した」というニュースが流れていました。

6 月 27 日、サトウキビ畑やタバコ畑が広がる楽園、伊江島。約 150 人が集団自決をしたガマの静けさ（ひめゆり平和祈念資料館では、集団自決を強制集団死と説明していました）。米軍に奪われた土地を取り戻す運動の拠点として建てられた団結道場。そして伊江島のシンボル、城山（ぐすくやま）。這いつくばって登った山頂の、まさ

機動隊とタンフカー

辺野古の海祭り準備

行動後のほっと一息

に息をのむ絶景と恐怖。高所に足がすくみ、二度と地上に戻れないんじゃないかと絶望しそうでしたが、日下さんがゆっくり前を歩いてくれたおかげでだいぶ救われました。あとから、城山も戦時中に形が変わるほど米軍の攻撃を受けたという話を聞き、怖がらずに、もっと大切に登れば良かったと思いました。

わびあいの里・ヌチドゥタカラの家で謝花悦子さんと再会。帰り際に、ここに 2019 年にも来たこと、その時に「平和について根こそぎ学習しろ。平和の武器は知識、理解は力だ」と言われたこと、ずっとその気持ちで行動していることを伝えました。今回の旅ではさらに悦子さんが私たちに伝えてくれた「武器をゼロにすることは、私は可能だと思う」という言葉を付け加えて生きていきます。

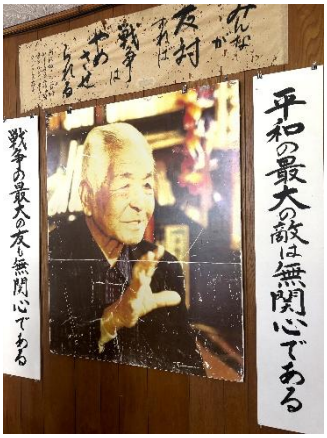
帰りのフェリーでうたた寝し、起きたらまだ沖縄にいて、とても幸せでした。

6 月 28 日、ひめゆりの塔・平和祈念資料館。犠牲になった女学生たちの写真パネルには、それぞれがどんな子だったか書かれていました。ひとりひとりが確かに生きていて、素敵な名前があって、どうしようもなく悲しくて、それでも今どうしても彼女たちを助けたい、救いたいという気持ちがごちゃごちゃになりました。親子で展示を見ていたお母さんが小さな子どもに、「アメリカやロシアが喧嘩をしたら大きな戦争が始まっちゃうから、みんなで反対しないとね」と話していました。

お昼に、広島で会ったリマさんに会いに行きました。待ち合わせ場所は普天間基地のすぐそばの食堂、ZumZum です。お店のオーナーは、「沖縄 “平和の礎（いしじ）” 名前を読み上げる集い」の実行委員長をされている町田直美さんという方で、リマさんも JICA（国際協力機構）で働きながら一緒に活動しているとのことでした。「読み

城山の山頂

団結道場



阿波根昌鴻さんの言葉

花謝悦子さん

上げる集い」は、毎年６月１日から23日の慰霊の日までかけて、24万人の沖縄戦犠牲者の名前を、日本以外の方も含め６千人ほどで読み上げる活動です。500人の名前を読むのに30分程かかるそうで、24万人だと240時間です。ひとりひとりの名前を読み上げていくことに、戦争の犠牲者をもう二度と、ひとりも生んではならないという強い思いが込めてられていると感じました。

米軍基地から流されているPFASも、酷い状況でした（※PFASとは、自然界で分解されにくい、永遠の化学物質と呼ばれる有機フッ素化合物。発がん性リスクが指摘され各国で規制されています）。作物の風評被害を恐れ、公表したくない農家もいる中、「この米軍基地被害も、元をたどれば沖縄戦のあとの強制土地撤収から始まっている。基地問題では一致できなくても、沖縄戦への思いは島民全員が一致できる。沖縄戦が今の基地被害に繋がっていることを知ってもらうためにも、読み上げる集いを開催している」と話していました。

日本で唯一地上戦を強いられた沖縄の、本気の運動だと思いました。よく、日本は外国に比べて、国民が自由や民主主義を闘って勝ち取った経験がないと言われます。しかし、沖縄がまさにずっと、その闘いの中心にいるんだと思います。

東京に帰りたくありませんでした。心から。少なくともあと１週間はいたかったです。本部町営市場の冷たいフルーツジュース、店主が弾く三線の調べ。市場の存続を希望する署名をみんなから集める佐藤さん。日下さん達が市場で買ってくれた部屋飲み用のお刺身。部屋飲みで午前３時までお刺身を食べる機会なんて初めてでした。なかま食堂の骨汁のコク。私が乗った２号車のメンバーは、日下さん・岡ちゃん・涼平くん・小川さんで、日下さんと岡ちゃんが前半運転をしてくれましたが、中盤から最後までずっと涼平くんが運転をしてくれました。最終日は堀田さんが加わり、南部

本部市場の看板

お刺身を買う方々

ラストナイトはいつもの食堂へ

のひめゆりの塔から再度 1 時間弱かけて北上し、普天間にいるリマさんとの再会に付き合ってもらいました。山本さんからのお土産リクエスト“島唐辛子の旨辛ペースト”がすぐに見つからず、突如目黒の書記達の探索ミッションと化したグループ LINE。帰りの那覇空港集合時間ぎりぎりまで沖縄を満喫する堀田さんとの二人歩き。ゆいレールでのカミキリムシ事件。牧志公設市場の食堂で 2 号車メンバー達と合流して飲んだオリオンビール。荻野さん達と沖縄の選挙について語り合った空港食堂。何もかも、忘れたくない思い出です。

今回の旅で、私たちは何本の泡盛を飲んだのでしょう？冬に観た「沖縄戦と琉球泡盛」にありましたが、泡盛の古酒は、親酒が入っている甕（かめ）に新酒を足して育てていくそうです。町田直美さんの「読み上げる集い」の活動を後援する団体の中に、沖縄県酒造組合が入っています。「平和でなければ古酒を残せない」「泡盛も平和も、育てるもの」という思いで、100 年古酒を夢見て泡盛を作っている酒造の方々がいます。

目黒支部の皆さんには、今回も本当にお世話になりっぱなしでした。2 号車のナビ係、全然役に立てなくてすみませんでした。海の煌めき、太陽を浴びて元気いっぱいの植物、原色の花が咲き誇り蝶が舞う、夢のように続く沖縄の景色を車窓から満喫していました。謝花悦子さんが、「沖縄は楽園だ」と言っていた通り、本当に楽園です。基地さえなければ。沖縄に、日本に、基地さえなければ。

旅はいろいろ、人生もいろいろ。「同じ米、同じ麹でも、蔵ごとに違う酒ができる。人間も同じさ（「沖縄戦と琉球泡盛」の中のセリフです）」。またぜひ、沖縄で会いましょう。基地も武器もなくして、一緒に 100 年古酒で祝えることを、ひたすら叶えたいと思います。

出汁のかたまり、骨汁

最後に自分用のお土産を購入

離陸まで、空港食堂にて